



### 心のふるさとに栄あれ

榎田 ふき

平塚らいてうは江戸っ子である。お江戸東京はあまりにも繁華で巨大で、煩雑で多士さいさいで、「ふるさと」の名にふさわしくない。

いま奇しきえにしに結ばれて、茅ヶ崎に待望のらいてう碑建設の動きが進んでいる。らいてうに「ふるさと」があつたのだ。青春の日の心に深く刻まれた思い出の地、茅ヶ崎こそが彼女の心のふるさとなのである。

らいてうの思慕が「心のふるさとびと」に響いたとはなんとという幸運だろう。市議会の女性議員を中心に茅ヶ崎市の有力者が挙げて発起人として名を連ね、「茅ヶ崎・らいてう記念碑を建てる会」が発足したのである。

旧知の川添隆行氏が会長を引き受けら



(7月31日、浜松市での日本母親大会で)

れ、事務局長には河野皓子さんが推され、副会長の岡崎周氏が進んで自宅に事務局を置いてくださったことのごとくに、私は感謝、感激だった。

建立にあたっては、現地のご厚意に甘え過ぎぬよう知恵をしばっている。大方のお力添えを切に乞う次第である。

(常任世話人代表)

### らいてうと茅ヶ崎

岡崎 周

平塚らいてうが、南湖院に入院していた「青鞥」同人の見舞いかたがた茅ヶ崎に避暑に来たのは明治四十五年の夏でし

た。その頃すでに南湖院は結核病院として有名で、体の弱い文人、芸術家など大勢の方が日本各地より入院していました。また茅ヶ崎は海水浴のできる避暑地、別荘地としても名を知られ、数十棟の有名人の別荘がありました。

数例を上げますと、松平の殿様、土屋の殿様、土井の殿様とか、前島弥男爵、民俗学の柳田国男、歌舞伎の団十郎、オッペケペーの川上音二郎、日本最初の女優マダム貞奴、ガントレット恒子、画家としては小山敬三、萬鉄五郎、速水御舟、筆谷等観、そしてドイツ、フランス、インド等の外国人の別荘も多くありました。



岡崎さん 一部として描かれた絵は、現在も記念品として南湖院

の親族の手元に大事に保管されており、また当時のらいてう関係の記録は、別荘研究家でもある当会の川添隆行会長が機関紙等に記載しております。

(茅ヶ崎・らいてうの会副会長)

# らいてう記念碑を建てる会 茅ヶ崎の市民運動として発足

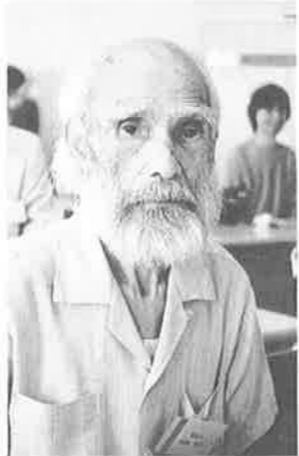
平塚らいてうゆかりの地、神奈川県茅ヶ崎市に記念碑を建てようとして、七月十七日、「茅ヶ崎・らいてう記念碑を建てる会」(略称・茅ヶ崎・らいてうの会)発足のつどいが開かれました。

茅ヶ崎市の文化会館に発起人、賛同者など七十人が参加、岡崎周(ひとし)さん(文化財を守る会)の司会で手ぎわよく進行し、発



奥村さん

起人(四十八人中二十二人出席)の紹介、経過報告、会則、今後の



川添会長

事務局の人々



活動の方向などが話し合われ、会長には元ジャーナリストで茅ヶ崎文化人クラブの川添隆行さんが選ばれました。

東京の「平塚らいてうを記念する会」からも五人が出席(榎田、小林、立松、白井、塩谷)、榎田ふきさんがあいさつ、小林登美枝さんが「らいてうと茅ヶ崎」と題して記念

講演をしました。らいてうの孫にあたる奥村直史さん(国立病院臨床心理士)も東京・小金井市からかけつけ、感謝の言葉をのべました。

「茅ヶ崎・らいてうの会」では、記念碑建立は東京の「記念する会」からの要請がきっかけにはなっているが茅ヶ崎独自の市民運動として取りくみたいと、幅

## らいてうと茅ヶ崎

講演要旨 小林 登美枝さん

の応接室で、出版者東雲堂の主人、西村陽吉とつれだって訪れた未知の青年、奥村博史と出会うことになりました。

らいてうと結婚後、肺結核になった博史が療養したのもこの南湖院でした。その後、らいてうは南湖院近くに家を借り、博史の入院中に生まれた長女曙生(あけみ)と親子三人で暮らしています。短い期間でしたが、らいてうにとって茅ヶ崎は「愛のふるさと」と呼びたい思い出深い土地でした。

茅ヶ崎はまた、若い日のらいてうの心中未遂「塩原事件」後、母光沢(つや)が心労のため胃腸をこわし、別荘を借りて静養した地であり、姉孝が南湖院に入院したこともあって、らいてうにとって足を運ぶ機会が多かった土地でもありません。らいてうの存命中のある日、私が「碑を建てるとしたらどこへ」とたずねた時、らいてうは「やっぱり茅ヶ崎かしらね」と答えています。

広く賛同者を集めています。発起人も市議会議員三十人中二十二人が党派を越えて名をつらね、県会議員二名、国会議員一名、知識人、文化人など四十八名。

会則には、日本女性運動の先覚者として不滅の輝きを放つらいてうの業績に学びつつ記念碑建立の資金募集活動をし、記念碑建設後は、事務処理の終わり次第解散すると明記されています。

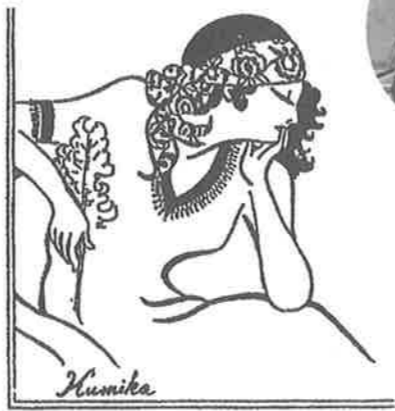
会長に推された川添さんは八十七歳の高齢ですが、「ひきうけた以上、運動の先頭に立ち、皆さんの期待に添いたい」とあいさつされました。

会では運動のシンボルマークとして、武井久美子さん(絵画教室主宰)のイラスト(左掲)をあらゆる宣伝物のカットに使っています。



武井さん

会の事務所は、茅ヶ崎市幸町二〇一八白雲閣内。



らいてうは振幅の大きい人生を送った人ですが、戦後は平和問題、女性問題の先頭に立ってきました。かなり困難な場面でも、らいてうのよびかけやメッセージがあると、ふしぎにまとまっていきました。らいてうは日本の未来を開く責任を自覚しており、全体をまとめていく大きな力も魅力も持っていました。

八十五歳で亡くなりましたが、末期ガンの激痛の中でもラジオを聴き、ベトナム戦争に胸を痛めていました。酸素テントの中にいながら、日本の前途や世界の平和の問題に参加しており、最後まで「新しい女」でした。



平塚らいてうは、東京生まれの東京育ちですが、茅ヶ崎を「私の愛のふるさと」と呼び、小説『厄年』の中でもそう書いています。

一九二二(明治四十五)年夏、らいてうは、茅ヶ崎の南湖院で結核療養中だった。



茅ヶ崎市文化会館で

# 加藤みどりのこと

岸田 靖子

大正二年、『中央公論』一月号にらいてうは「自分は新しい女である」と宣言した。自ら新しい女の名のりを挙げたのは、世間の新しい女批判に弱腰になった青鞥社員たちへのあてつけが多分にあつたと自伝に記している。

らいてうのように勇ましくはないが、切実な思いをこめて、青鞥誌上に「私は、新しい女になり度い」と書いたのは、創刊時からの社員、加藤みどりである。

大正三年、失職した夫にかわり、子どもを預けて東京日日新聞の記者となつたみ

どりは、男ばかりの職場で、女としての「性は最も大切なもの」との認識をもちはじめた。家庭と仕事、作家としての生活の中で葛藤しつつ、「新しい女」の生き方を模索していた。

みどりの旧姓は高仲きくよ。明治二十一年、信州の医者の娘に生まれた。十七

歳の時上京。飯田町に煙草や化粧品を商う店をもち、勉学のために上京する弟妹たちの面倒をみるかたわら、徳田秋声に師事し、作家として立とうとする。

やがて雑誌に作品が掲載され、文壇にも少し名が知られるようになる。そんなみどりに恋をしたのが、早稲田の学生加藤朝鳥である。みどりのペンネームは、朝鳥と出会った頃から使いはじめ、朝鳥の卒業を機に、生田長江や秋声の仲立ちで挙式した。

文学への理想が高く、時代に迎合しない朝鳥との暮らしは貧しいながら、みどりの理想とした結婚生活でもあった。朝鳥訳によるイエーツの詩劇『幻の海』上演に際し、女王役で主演。また岩野泡鳴を中心とする文士の集まり、「十日会」には夫婦そろって参加し、らいてうをはじめ、小寺菊子、荒木郁、有島生馬等と親交があつた。朝鳥はなかなかのフェミニストではあるが、夫婦の間には軋轢もあつた。青鞥誌上には、自らの結婚生活を題材とした作品が多い。青鞥以後、児童文学にも意欲を示すが、子宮癌で三十三歳の命を閉じた。(らいてうを読む会)

小林登美枝著

## 陽のかがやき

平塚らいてう・その戦後

## 本の紹介

らいてうの『自伝』編さんにあつた小林登美枝の手になる評伝。戦後のらいてうを身近に知り、婦人運動のいわば「戦友」でもあつた著者ならではの確かさで、『青鞥』発刊から婦選運動を経て、戦後の平和運動に到達したらいてうの思想と人間像を伝えていきます。

とくに病魔とたたかいながら『自伝』の執筆を急いだ晩年のらいてうの紹介には、著者の深い思いがこめられていて胸をうちます。(新日本出版社 一、一〇〇円)

## 事務局メモ

- 6月7日 ニュース第6号発送。
- 7月17日 「茅ヶ崎・らいてう記念碑を建てる会」発足に出席。
- 7月31日 第40回日本母親大会に出店(折井、立松)。
- かねてから病氣療養のため、辞意を表明してきた立松隆子事務局長は9月半ばで退任しました。
- 94年度の会費の納入を。

シリーズ

# らいてうの周辺